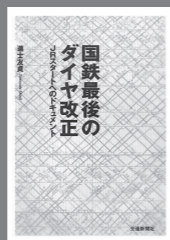


鱗祭

第六弾 拡大版 目から鱗

編集部員おすすめの作品を一挙に紹介するこの企画「鱗祭」も、今年で第六弾となりました。今回は本や漫画、CDの全10作品を取り上げています。「芸術の秋」のおとも是非。



REPORT



都月 のおすすめ本

明け方の若者たち

カツセマサヒコ

20代。人生の中でその10年間は、出会いも別れも最も多い時期といえるだろう。我々がまさに経験しようとしている、この10年間で、何を生きる糧とし、どのように社会に順応していくのだろうか。この作品では恋人や友人との出会い、そして避けられない現実との対峙が主題となっている。

大学4年生、就活を終えた“僕”は、4月中旬に内定を勝ち得た人のみが参加できる、悪趣味な「勝ち組飲み」に参加していた。その最中、まるでこの飲みが不服かのように佇む“彼女”を見て“僕”は一目惚れする。早々に飲み会を抜けだした“彼女”は自ら“僕”を呼び出し、二人で飲みを続行するのだった。この出来事をきっかけに二人の仲は進展。程なくして社会人になった“僕”は職場でも出会いに恵まれる。野心あふれる同期の尚人に会い、二人は親友に。“彼女”と



記事執筆者のコメント

読んですぐに、自分の経験と錯覚するような作品の魅力に惹かれました。短めで読みやすくもあります。映画化もされているので、是非。

親友。二つの柱を得たはずの“僕”は理想と現実とのギャップに苦しみ、悩み蝕まれていく。現実の理不尽に向き合っていくという、なんと泥臭い20代の青春がこの作品の魅力だ。

恋人や友人と一緒に聞いた音楽、行った店、買った商品。これらの要素は思い出を呼び起こす装置として機能する。『明け方の若者たち』ではこういった描写が頻繁に登場している。皆さんも経験がないだろうか。「このお店、前に恋人と行ったな」とか、「学校帰りに友達とあのコンビニ寄ったことあるな」とか、そういった思い出の反芻を一度は経験したことがあるだろう。具体的な名前が多用された描写は現実ともほど近いからこそ、読者は“僕”に共感しやすく、似たような経験をしたように錯覚する。皆さんも残酷かつリアルな“僕”の青春を是非体験してほしい。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



ふーぶ のおすすめ本

国鉄最後のダイヤ改正

進士友貞



記事執筆者のコメント

分割民営化の本でここまで実務寄りで書かれてる本はあまり無いように思います。秋の行楽のおとも是非。(書店にはほぼ無いですが図書館ならあります!)

なぜ同じJRの京都駅でも新幹線だけはJR東海でそれ以外はJR西日本なのか。どうしてJRはあの数に分かれているのか。一体誰が、いつ、どんな理由で決めたのか。誰も経験したことのない国鉄分割民営化(以下:民営化)という巨大な困難に立ち向かった1人の鉄道員が描き出すドキュメンタリー。

時は昭和末期。国鉄の経営企画室にいた筆者たちはわずかな人数で民営化の勉強会を始める。組織内の風向きに左右されながら議論は一進一退の日々が続く……、と思いきや急転直下で民営化の方針が決定。民営化の中身が煮詰まってくると落ち着く間もなく筆者は全国の列車の時刻を決める部署へ異動となり、話は国鉄最後のダイヤ改正へと進む。ダイヤとは鉄道会社にとってこれ以上ないほど大切な「商品」。新会社

(現:JR)にとって最初のダイヤとなり、民営化の成否を握るからこそ、抜かりないものにしなければならない。しかしダイヤ改正までの準備期間はかつてない短さ。全国の担当者とともに民営化後を見据えて東奔西走しながら国鉄最後の「新商品」を組み上げていく。そしてJRになった最初の日、列車は無事に走り出したのだった。

日本の鉄道にとっての大転換点を記録した一次資料満載の珠玉の1冊。しかしそれだけの本ではない。タイトルこそ「ダイヤ改正」と如何にもとっつきにくく聞こえるが、メインは国鉄という巨大組織の中で繰り返される人間ドラマである。教科書には載らないような人々が作り出す歴史の1ページ。この本はそんな人々の暮らしを、昭和の空気感を、感じさせてくれるのではないだろうか。

はみだし
すてーじ

やたらと急に暑くなった泣
⇒早く涼しくなってほしいですね……。秋服が着たい。

(菜・4 臆病な白起)
(これを書いている9月末はまだまだ暑いです;編)



海条 のおすすめ本

リボルバー

原田マハ



記事執筆者のコメント

2023年7月に文庫化したばかりです！ ゴッホの絵を題材にした同一著者の作品、『美しき愚か者たちのタブロー』や『たゆたえども沈まず』もおすすめ。

日本に憧れを抱き続け、『ひまわり』や『星月夜』を始めとする数多くの絵画を残したフィンセント・ファン・ゴッホ。彼の友人かつライバルであり、タヒチに魅了されたポール・ゴーギャン。彼らを追いかけ続ける冴は、パリのオークション会社で働きながら美術史を研究している。ある日会社に持ち込まれた拳銃は、ゴッホの自殺に使われたとされるもの。高額なオークションの実現により経営難を乗り越えるべく、冴は拳銃とゴッホの関連を証明しようとする。

持ち込まれた拳銃について調べていくうちに、ゴーギャンと拳銃の関係が示唆された。ゴッホとゴーギャンの複雑な関係、彼らの苦勞、そしてゴッホの死。拳銃を取り巻く謎に追われながら、冴は彼らに関する文献や家系図の読み込みや聞き取りを続けた。当時はまだ理解され難かった、新たな時代

の絵画を目指したゴッホとゴーギャン。様々な障害や葛藤にぶつかりながらも、生きるために絵を描くと同時に、絵を描くことで生きがいを見出した彼らの壮絶な人生が浮かび上がる。拳銃は誰のものなのか？ ゴッホの死との関連は？ 読み進めるうちに、拳銃の謎の背後には、絵画に懸ける彼らの想いや情熱があることが明らかになる。

著者は、MoMA（ニューヨーク近代美術館）での勤務経験を経た後、フリーのキュレーターとして活躍。入念な調査による史実を基にしたフィクションは、絵画の面白さや奥深さを存分に伝えてくれる。絵画にあまり興味がない方も、読後は美術館に行ってみたい、絵が描かれた背景が知りたいときっと思うはず。登場人物や著者の絵画愛に、心動かされる体験を是非。



でこぼん のおすすめ本

虐殺器官

伊藤計劃



記事執筆者のコメント

本作品は映画化もされていますが、こちらは小説を読んだ後に観るのがおすすめ。同作者の『ハーモニー』も本作品と比較しながら、合わせて是非一読を。

作者がその虐殺に求めたのは、爽快感だった。人々は気づかぬうちに、虐殺へと駆り立てられていた。

『虐殺器官』はSF作家として有名な伊藤計劃のデビュー作である。舞台は、9.11事件以降、テロとの戦いに腐心する大国アメリカ。先進諸国では管理制度が整備され、平和な日々が続く一方、後進諸国では内戦や大規模虐殺が急激に増加していた。アメリカ情報軍特殊捜査群1分遣隊に所属するクラヴィス・シェパードは、これらの紛争地への潜入と首謀者の暗殺を手がけている。この任務の中でシェパードは、各地で増加する大量虐殺の裏に潜む、ジョン・ポールという人物を追うことになった。

この本は何度読んでも楽しめる作品だ。まず初読の際に

は、この本の世界観を思いっきり楽しもう。SFらしい、近未来的な装置の数々と、作者がこだわったという、作品全体から溢れる疾走感と爽快感。ジョン・ポールとは何者で、『虐殺器官』が意味するのはどんなもので、立て続けに起こる凄惨な事件の果てには何が待っているのか。思わず没頭して読んでしまうテンポの良さが、とても心地良い。そして2度目に読むときには、それぞれの登場人物の「正義」と「悪」を考えてみよう。中でも注目してほしいのが「悪役の正義」だ。悪役とされる登場人物の行動の源や、その選択に至った過程などを辿っていくと、まるでそれが「正義」であるかのように感じてしまう衝撃が味わえる。この作品ほど、それがクセになるものはないと思う。これまでSF小説をなんとなく遠ざけてきた人がいれば、非常にもったいない。アクション映画さながらの爽快感を、是非ど堪能あれ。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



でこぼん のおすすめ本

若きウェルテルの悩み

ゲーテ



記事執筆者のコメント

まっすぐで純粋なウェルテルですが、まっすぐすぎるあまり婚約者の男のことを邪険にできず、ロッセと3人で仲良くピクニックする場面は非常に滑稽です。

恋をしたことはあるだろうか。胸は高鳴り、まるで春が訪れたかのように目に映る世界のすべてが輝く。かの人を想ってはため息をつき、かの人の一挙手一投足で感情がかき乱され、かの人が目の前にいようものなら、少し背伸びしてでもかっこつけようとする。どうしようもないほど溢れ出す感情。

そんな恋心を如実に表現した作品が、ゲーテの名作『若きウェルテルの悩み』である。200年も前の海外の文豪が書いた作品と聞くとハードルが高いように感じるかもしれないが、ざっくり言えばこの本は、主人公のウェルテルが、大好きなロッセという女性についてひたすら喋りまくるといった簡単なお話だ。少しばかり大袈裟にロッセを語るウェルテルのことばからは、片思いをしていたかつての自分自身の感情の揺れが想い起されて、面映ゆい一方で、どこかにこやかに応援し

たい気持ちになる。ニヤニヤが止まらない。

しかし、ただのお惚気で終わらないのが、この作品の名作たる所以だろう。ウェルテルが恋したロッセにはすでに許嫁がいたのだ。この彼の苦悩にこそ、本作品の良さが詰まっていると思う。恋のときめきでキラキラしていた前半部分から、時を経るごとに増していく恋心によって理想と現実の乖離に苦しんでいく彼が紡ぐことばには、思わずハッとさせられるものがいくつもある。相手と一緒にいたいエゴと、相手の本当の幸せを思う気持ちとに、自分ならどう折り合いを付けるのだろうか。嫉妬、絶望、その果てにたどり着く一つの答え。彼の喜びと苦しみに触れあう中で、この本は私を待っていたのだと、そう思えるような一文に、きっと出会える。恋をした、すべての人に読んでほしい。



秋桜 のおすすめ漫画

ブルーピリオド

山口つばさ



記事執筆者のコメント

実はこれ、YOASOBIの「群青」の元となった作品です！ YOASOBI 好きのあなたも、アートに興味があるあなたも、是非一度手に取って下さい。

高校2年生の矢口八虎。成績優秀で人付き合いも良く、夜には不良仲間とバカをする「インテリヤンキー」。そんな彼は、ひょんな出来事がきっかけとなりアートに興味を持った。正解の無いアートの世界に心酔し、これこそが自分の本当にやりたいことだと感じた八虎は、芸術界の最高峰、東京藝術大学を志望するようになる。

とは言うものの、藝大とは誰もが入れような所では無い。人気学科の倍率は軽く10倍を超え、多浪なんて当たり前。巷で「日本一難しい」とも囁かれる奇抜な入学試験を突破した全国の鬼才達が自らの感性を思う存分研ぎ澄まし、挙句卒業生のおよそ半分が行方不明になる……言うまでもない「魔境」である。いくらアートに興味を持ったとはいえ所詮初心者である八虎。果たして彼は魔境・藝大に入ることは出来る

のか？ 如何せん、アートの世界とは奥が深いもの。天才として後世に名を遺したピカソを知っていても、ピカソの良さを語る人はそれほどいないだろうし、ましてやピカソのような作品を1から作り出すことは困難極まりないだろう。八虎もピカソの良さをあまりわかっていなかったが、彼はアートを才能の賜物であるとは決めつけなかった。自らが積み重ねてきた努力と感性を信じ、目標に向かって走り続ける。

八虎と一緒に、アートの世界に飛び込んでみてはいかがだろうか。アートの前提知識が無くとも、ストーリーを楽しみながらアートの奥深さを味わうことが出来る、ということがこの作品の大きな魅力だ。もしかしたら、あなたが次にピカソの絵を見かけた時、これまでとは違った眼で鑑賞できるようになっているかも知れない。

はみだし
すてーじ

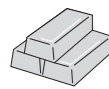
いつもはみだしすてーじメインで見ます。
⇒嬉しいですね。回答の腕を磨かねば……。

(人環・院 ああああ)
(お時間があれば記事も覗いてみてくださいね；編)

はみだし
すてーじ

テストやばい……
⇒お疲れさまでした。無事に乗り切れましたか？

(理・2 北大西洋条約機構)
(もう前期が遠い昔のよう；編)



しばふ のおすすめ漫画

片喰と黄金

北野詠一



記事執筆者のコメント

主人公同様、作品そのものも苦難を乗り越えてきた。一度は打ち切りに遭いながら別の出版社と再出発し、この夏完結。旅の行く末を是非見届けてほしい。

物語は1849年・アイルランドから始まる。当時のアイルランドは、主食であるジャガイモの不作が続いたことで未曾有の大飢饉に襲われていた。飢餓や病気で100万人もの人が命を落とし、残された人も国外に移住……。最終的に国の人口を半減させたとも言われる「ジャガイモ飢饉」である。世界史履修者にはお馴染みだろうか。

「飢えも知らない、病気も知らない、子どもも孫もその先もずっと何の苦勞も要らないような大富豪になるために、黄金を掴みにいきます！」

飢饉で家族も農地も失った少女・アメリカとその従者・コナー。草の汁をすすって飢えを凌ぐ生活をしていた2人は、人生逆転を賭けてゴールドラッシュに沸くカリフォルニアを目指す。劣悪な環境の移民船になんとか乗り込み、着いた先

はニューヨーク。アメリカを東から西へと横断する2人を待ち受けるのは、未知の文化、雄大な大地、そして豊かな出会いだ。

絶望を知っているからこそ大きな夢を追いかけるアメリカのエネルギーがまぶしい。本作は2人の絆や道中で出会った人々との関わりを中心に進む。しかし、現代日本ではお目にかかれない料理の数々や、見開きいっぱい描かれる景色も魅力的だ。漫画だからこそ情景が印象的に心に飛び込んできて、主人公たちと共に旅をしている感覚にさせられる。主人公らは実在の人物ではないが、歴史の中を生きていた一市民が何を食べて、どんな景色を見ていたのか。どんな思いで西へ西へと広い大陸を開拓していったのか。きっと名もなき人々の暮らしに思いを馳せるきっかけになるはずだ。



砂満し のおすすめCD

レポート

Official髭男dism



記事執筆者のコメント

実は題名の『レポート』は、まさに大学のレポートから取ったものだそうです！ このアルバムを無限ループで流しながらレポートを書くかと捗るかも……？

キャッチーで強く印象に残る曲を次々と生み出しているOfficial髭男dism。彼らが新譜を出せば必ずと言っていいほど著名な作品や広告のタイアップに用いられる、現在のJ-POPを代表する存在であることは、多くの人の知るところだろう。ここでは、彼らが大ブレイクする前、インディーズレーベルからリリースした作品を取り上げたいと思う。

今回紹介する『レポート』は、彼らの特徴といえるポジティブなサウンドが溢れる『始まりの朝』『Rolling』、ライブで演奏される機会の多い『犬かキヤットかで死ぬまで喧嘩しよう！』『異端なスター』などが収録されたアルバムである。その中で自分が特に好きな曲は最後を飾る『Trailer』。前曲『イコール』からの流れを継いで、このアルバムを哀愁を残して締めくくっている。全体で30分弱なので、1曲目の『始

まりの朝』で晴れやかな気持ち呼び起こされ、中盤の盛り上がる曲を経て、ラストの『Trailer』で感傷的な気持ちに落ち着く、というサイクルを繰り返したくなる、味わい深い作品に仕上がっている。

また、彼らはインディーズレーベルより3枚のミニアルバムをリリースしており、『レポート』はそれらの内の3曲目である。ボーカル藤原の優しい歌声も相まって、1曲目は全体的に甘めの雰囲気を感じたアルバムであるが、2曲目、3曲目と表現の幅がさらに広がっていき、メジャーデビュー後の数々の作品へと繋がっていく様子を感じられる。いつも予想を裏切られてしまう個人的なメロディは彼らの曲の特徴だが、それは初期の曲にも表れているので、是非『レポート』などを聴いてその驚きを感じていただきたい。

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI

UROKO MATSURI



モアイ のおすすめCD

Ninth Peel

UNISON SQUARE GARDEN



記事執筆者のコメント

夏休み前にライブに行ってきました。MCほぼなし、シンプルかつ最高のライブでした。年々ストイックになっている気が……。本当に大好きなバンドです。

来年結成20周年を迎えるロックバンドUNISON SQUARE GARDEN。『Ninth Peel』は、そんな彼らにとって9枚目となる最新アルバムで、「ユニゾンらしさ」をとことん楽しめる作品だ。疾走感あるバンドサウンド、ホーンやピアノが入ったポップな楽曲、切れ味鋭いロックチューン、無骨かつ美しいバラードなどなど、収録されている楽曲は非常に多彩で、これまでにない新しい要素も取り入れられているのに、それでも「ユニゾンらしい」と感じるのにはなぜなのだろうか。

このアルバムを聴いていると、彼らは「真面目に楽しんで」楽曲を作っているのだろうと何度も感じる。信頼関係の下、メンバーそれぞれの個性やこだわりが高次元で合わさることで、「ユニゾンらしさ」は生まれているのではないだろうか。彼らはそれを当たり前のようにこなし、余裕すら感じさせる

が、現在に至るまで楽曲制作とライブ活動をコンスタントに重ね、各々でも演奏や歌唱の技術を磨いてアップデートをしつつ、自分が良いと思うもの、大切にしたいこととずっと向き合ってきたからこそ為せる業だろう。そうして生まれる「ユニゾンらしさ」は、軸はぶれないまま常に更新されている。

わたしは彼らの曲から「自分に従って自分の足で歩け」というメッセージを受け取る。それは彼ら自身の活動にも一貫する姿勢だ。周囲に流されず、自分のこだわりを大切に。同時に、リスナーひとりひとりを尊重し、解釈や楽しみ方を押し付けない。自分自身に対しても他者に対しても、どこまでも誠実に歩んできた彼らは、結成20周年を目前にした今、この3人でしか到達できない境地にいる。そしてこれからも、彼らにしか進めない道を歩んでいくのだろう。



モアイ のおすすめCD

eyes

milet



記事執筆者のコメント

先日miletさんのライブに行きました！ 全身を使って歌っていたのが印象的でした。そして驚くほどパワフル！ エネルギーに満ち溢れた空間でした。

『eyes』は、シンガーソングライターのmiletが2020年に発表したファーストフルアルバムである。タイアップ曲を多数収録しており、miletをあまり知らないという方でも、聞き覚えのある曲を見つけられるのではないだろうか。全18曲というボリュームで、miletの魅力を存分に味わうことができる。そこで、ここからはわたしの思うmiletの2つの魅力について掘り下げてみたい。

まず1つ目は、その歌が放つ圧倒的な存在感だ。彼女のハスキーで力強い歌声は、聴く者に鮮烈な印象を残す。また、発音も特徴的だ。miletの歌詞は英語と日本語を織り交ぜたものが多いが、そういった曲を歌う際、英語の発音は日本語に、日本語の発音は英語に近づけることを意識しているという。それにより、異なる2つの言語がまるで1つの言語のよ

うに溶け合って、新鮮な心地良さが生まれている。『inside you』や『Wonderland』など、miletにはスケールの大きい曲が多いが、思わず聴き入ってしまうような強い存在感のあるボーカルだからこそ、そうした曲との相性が抜群に良いのだと思う。

そして、2つ目の魅力は高い表現力だ。エッジの効いた痺れる低音から美しい高音まで、幅広い歌声を繊細に使いこなす。そんな高い技術をもって、歌詞の言葉の奥にある感情までも包み込むようにして丁寧に楽曲を表現していると感じる。その表現力ゆえに、彼女の作品はこんなにも聴く者の心を強く揺さぶるものになっているのではないだろうか。このアルバムを通して、miletの圧巻の表現を是非実際に「体感」してみてほしい。

はみだし
すてーじ

人生初クレカを入手して大人気分になってます。うきうきです。
⇒昔からの友人が財布からサッとクレカを出したとき、衝撃を受けました。

(総人・2 カレーパンナちゃん)
(大人の仲間入り；編)

はみだし
すてーじ

一度でいいからヤクルトをコップになみなみと注いでガブ飲みしてみたい
⇒天才ですか？

(工・院 ポガちゃん)
(確かにいつも物足りなさを感じていた；編)